

〈資料紹介〉 泉鏡花「南地心中」取材メモ

——明治四十四年の住吉大社宝の市——

田 中 励 儀

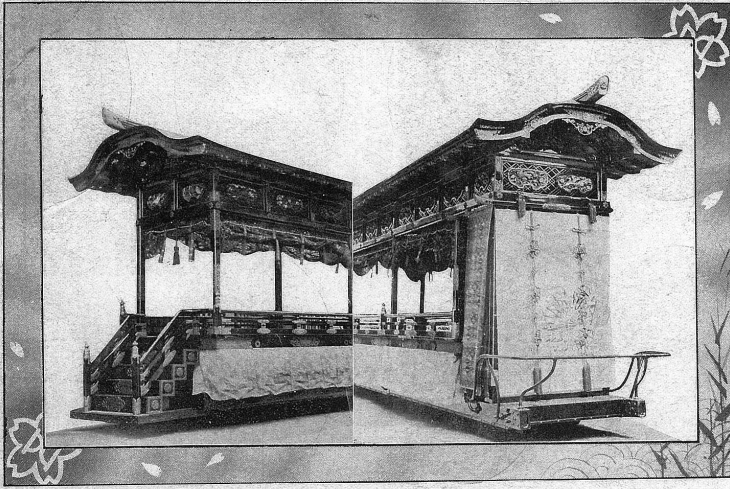
明治四十四年十月十八日、泉鏡花は、道頓堀中座で「婦系図」上演中の喜多村緑郎に招かれて、大阪を訪れた。

梅田駅に着いた鏡花は、喜多村の番頭に迎えられ、指定の宿で旅装をとくと早速、中座に案内された。(中略)その晩、芝居がハネると「三碧会」連(喜多村を囲む会→引用者注)の宴席が中座の前茶屋に設けられ、(中略)鏡花を正座にすえて、「宝の市」の行列到来を待つことになった。^①

宝の市とは、「神功皇后が三韓からの貢物をはじめ百貨を庶民に頒たれたという故事によるもので、わが国の市のはじまりであるといわれ」^②る神事であり、江戸期には陰暦九月十三日に執り行われていた。当時は「神前にをいて、市を立舁(たてこ)をうりかふ」^③賑やかな一日であったらしい。しかし、『住吉大社史』^④によれば「明治五年の改革によつて中絶」、しばらく空白の時が流れる。復興は明治三十一年。

前年、大阪築港起工式のため時の市長が住吉大神に祈願した際、松原の路傍より「禁裡御祈禱所」の石標を発見したことが復興の契機となった。その日を記念して、今度は陽暦十月十七日を期して執行、神輿渡御や市女行列など華やかな行事が繰り広げられた。この神事は「昭和十五年まで続いたが、戦時中となつて中絶し、戦後は十月十七日祭典のみを執行」^⑤っている。

鏡花が来阪した明治四十四年は復興十四年目にあたり、当時の新聞には「住吉神社の宝の市は例年の通り十七日挙行す、市女及び稚児は南地五花街の芸舞妓数十名花々しく打扮^{いで}ち十八、十九の両日は供奉の姿にて廓内を練歩くとぞ」(「宝の市神事」「大阪朝日新聞」明治44・10・15)と予告されている。鏡花を招いた喜多村は「実はこれは氏に見せたいものだったが、見られて悦に入られたことは思った以上のものだった」と、鏡花の感動を伝えている。この時の見



【写真①】

間をもとに、鏡花は翌年一月、「新小説」第十七年第一巻に小説「南地心中」を発表した。本作は、船場の大金持丸官に落籍された名妓お珊が、四天王寺で猿曳きをしていた美青年多一に心惹かれ、引き取って世話をするが、彼にはお美津という許婚者がいることを知って、二人ともども無理心中する話である。

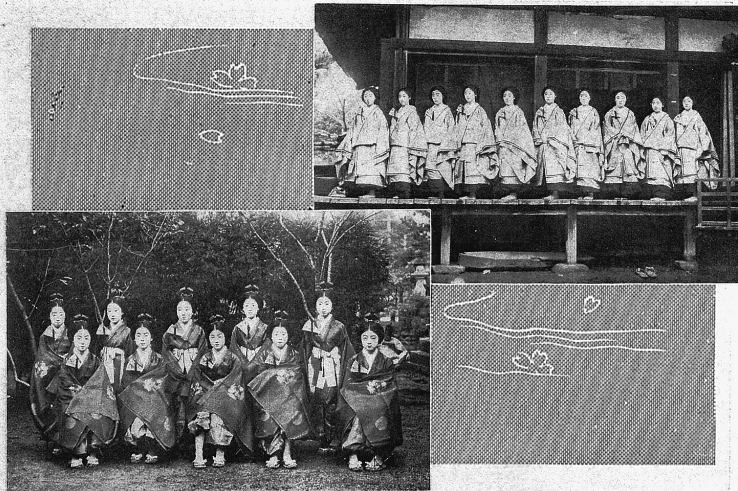
無理心中は、道頓堀から太左衛門橋へと練り歩く行列の最中で行われた。その時、お珊は行列の主役たる十二名の市女のお職として「下げ髪、緋の袴と云ふ扮装」(三)で歩みを進め、「烏帽子、狩衣」姿のお美津は「金蒔絵に銀鉾打つた欄干づき、幅も漆の車屋台に、前囃子とて楽を奏する、其の十二人と同じ風俗」に、また「浅葱紗の素袍着」た多一は「後囃子が、又幕打つた高い屋台に、これは男の稚児ばかり、すり鉦に太鼓を合はせて、同じく揃ふ十二人と(中略)同じ装束」(十八)に装われていた。

この練行列の様子は、例えば大正七年発行の『第三十四回 芦辺をどり』プログラム^⑥に、関連写真とともに詳しく記されている。

〔A〕前家台^{まやたい}は大阪に因縁深き豊太閤盛時の文物に因み総蠟色塗高欄造りとし(中略)棟及垂木鼻木悉皆透し鍍金地彫の金具を鏤^{ちりばめ}たれば其壯麗蓋し本邦に於ける稀に見るべき美術的家台と称賛せらるに至れり【写真①】

〔B〕十二人の囃子^{なひな}皆退紅色の着付に白の水干花鳥烏帽子を戴き

寶の市の神事と女市



【写真②】

〈資料紹介〉 泉鏡花「南地心中」取材メモ



【写真③】 昭和10年 宝の市練行列刷物

瓜うりと崩れ市松を配織はいしきしたる胴巻たもとまきを廻らし此廓の男の子等鉦太鼓にてはやつたつる音賑ねむらはしかりけり

お珊おさんの市女姿は「C」に、お美津の前囃子姿と屋台は「A」「B」に、多一たひつの後囃子姿と屋台は「D」に、それぞれ対応する。時代は下がるが、昭和十年に発行された宝の市の刷物【写真③】からは、行列の並びを確認できる。中座の前茶屋に陣取った鏡花は、目の前を通る華やかな練行列に強く惹きつけられたのだろう。二ヶ月ばかりして発表された「南地心中」の叙述は正確である。

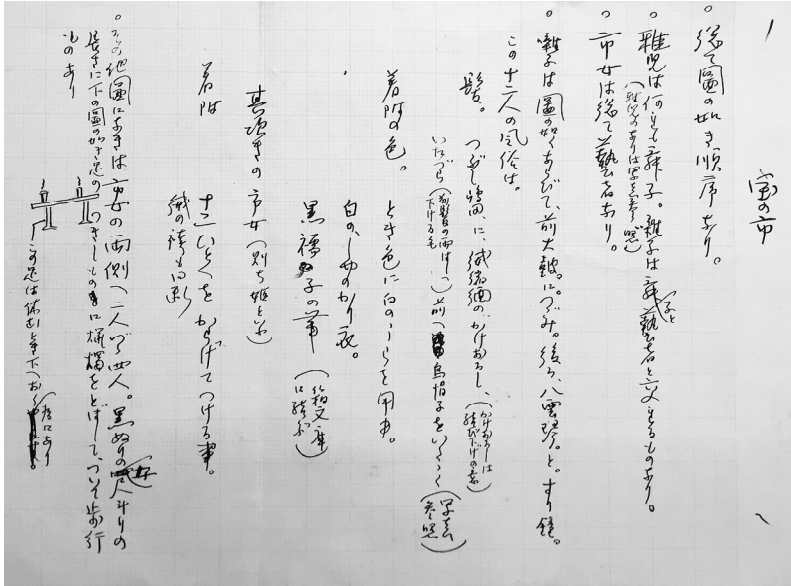
太鼓、鉦、八雲琴の合奏
さながら見る人をして眼
眩せしむる計りなり

「C」市女は上藤の姿にて頭髪
はおすべらかしにて絵元
結もて飾り緋塩瀬の長袴
を引上げて腰にて白衣
幾領いくへを重ねたる上に五ツ
衣を着けたる者十人

【写真②上】

「D」後家台うしろやたいに（中略）四神の
旗を樹たて茶色地に祇園木

【写真④】



〈資料紹介〉 泉鏡花「南地心中」取材メモ

実は、鏡花は正確な叙述の基となる〈取材メモ〉を残していた。

秋山稔氏、穴倉玉日氏と共に取組んでいる科学研究費・基盤研究C

「泉名月氏旧蔵、泉鏡花未調査資料の実証的研究」(課題番号：

17K02169) による調査の中で見出されたものである。「宝の市」の

標題を持つペン書三枚。以下に写真【写真④】とともに翻刻する。

翻刻にあたっては、読みやすさを考慮して()内の二行書き・三

行書きも一行に記した。

「一枚目」 宝の市

。総て図の如き順序なり。

。稚児は何れも舞子。囃子は舞子と芸者と交れるものなり。

(稚児のなりは写真参照)

。市女は総て芸者なり。

。囃子は図の如くならびて、前太鼓に。つゞみ。後ろ、八雲琴。

と。すり鐘。

この十二人の風俗は。

髪。つぶし嶋田に、絨縮緬の、かけおろし、(かけおろしは

結び下げの意)

いたづら(前髪の両はしへ下げる毛)前へ烏帽子をいたゞ

く(写真参照)

②

此一隊は南地の女工場(女工場とは藝妓の試験所(演舞場)に比喩して、芝居裏戎橋筋(芝居)の入り口(芝居)を指す)に於て、芝居裏戎橋筋西(芝居裏戎橋筋西(芝居)の入り口(芝居)を指す)に於て、式を行ふを例とす。

十七日、十九日の三日とす。そのうち、十七日は住吉神社

へ行きて式を行ふものなり。

即ち十六日の夜、式の前晩の十二時より、女工場(女工場とは藝妓の試験所(演舞場)に比喩して、芝居裏戎橋筋(芝居)の入り口(芝居)を指す)へ入り、浴の後、髪を梳き、衣裳を整へ、前夜の支度をなす。支度了る時は、別々退るものとす。

十七日の朝七時より、時の下女工場をでて、住吉神社

へ行く。

式場(式場とは藝妓の試験所(演舞場)に比喩して、芝居裏戎橋筋(芝居)の入り口(芝居)を指す)と稱し、本社交例の例とあり、本にあり、

姫十人にかかいて、正面席の右に行き、神主より土冠(土冠とは、式場の入口(芝居)の入り口(芝居)を指す)に所帯をつけ、袷ひ長布、袴扇と身(身とは、式場の入口(芝居)の入り口(芝居)を指す)として、自分の座

あし座に座す。その後、入念に因縁の話を為す。即ち一列に十人あり、

白粉をつけ、髪を梳し、玉井扇(玉井扇とは、式場の入口(芝居)の入り口(芝居)を指す)をまく。

着附の色。とき色に白のうらを用ゆ。

白の、しやのかり衣。

黒襦子の帯(箱文庫に結ぶ)

其次ぎの市女(則ち姫といふ)

着附 十二ひとへをからけてつける事。

絨(ワタ)の袴も同断

その他図になきは市女の両側へ二人づ、四人。黒ぬりの五尺斗りの長さ(下の図の如き(図省略、写真④参照—翻刻者注))、足のつきしものに蠟燭をとほして、ついて歩行ものあり

——この足は休むとき下へおく為にある

〔二枚目〕

此一隊は南地の女工場(女工場とは藝妓の試験所(演舞場)とは違ふ)並によみ書き、縫物、なども教ゆる場所) 則ち芝居裏戎橋筋西へ入る所より繰出すを例とす。

宝の市は十七、十八、十九の三日とす。そのうち、十七日は住吉神社へ行きて式を行ふものなり。

然して十六日の夜、式日の前晩の十二時より、女工場へ行きて、入浴の後、髪を結び、衣裳を整へ前夜の支度をなす。支度了る頃は則ち夜のあくるといふ。

る

。是を了(こゝろ)一列にあらふ。そこへ白木（白木）し色の「こわめし」のこを穿しを土器に盛りしをのせて出す。
(枕は。昆布。檜扇。松林)

。姫はこきより市女笠を著て、松林を練る。

。高煙籠の傍、石の鳥居の所に仮宮ありて、そこで十人（格）へ懐をいれ給ふ。神主向ひながら神文をよむ。

夫より、五穀を交せ入る一鉢、舂を市女一人ごとに一箇づ持て候宮へ供ふことを式のうりとする。

。其日は夫より女工揃へ居りて、仮宮をぬぐ。

。二日の丁巳は午限二時が女工場（女工場）行。五時の限に練り出す。(高煙籠。檜扇。松林。)

。中流、假宮を廻す。道頭（道頭）をうら。中流の庄（庄）の門に休む。(十休はとまらぬ)

。十九日以後の日は、練あるのは前日同様にて、午限よりか、その日迄源を走りしとす。宗を廻し廻りて高田屋（高田屋）の門に休み、十二時迄は女工場（女工場）行。

。其日は夫より女工場へ戻りて、衣装をぬぐ。

。十七日の朝七時より八時の間に女工場（女工場）を出て、住吉神社へ行く。
。「さつきの御殿」と称して本社右側の門を出でし所にある式殿に至るころにて袴の裾をおろして長くはく。
。姫十人にかざりて、正面床の間の所に行き神主より土器に御酒をうけ、結び昆布、檜扇、を与へられて自分の定めし席に戻る。これは一人々々に同様のことを為す。然して一列に十人ならば。
。「みこ」来りて、白粉をつけ、紅をさし、天井眉、を墨く。(是は総てやる真似をするなり)
。「三枚目」
。是を了へて亦一列にならぶ。そこへ白木の「へぎ」にもろこし色の「こわめし」のごときものを土器に盛りしをのせて出す。(稚児は。昆布。御酒。檜扇杖をうくる事あり)
。姫はこれより市女笠を着て、松林を練る。
。高煙籠の傍、石の鳥居の所に仮宮ありて、そこで十人揃ふて腰かけにならぶ。神主向ひ合ひて神文をよむ。夫より、五穀を交せて入れし一鉢、舂を市女一人々々に一箇づ、持ちて仮宮へ供ふこれを式の了りとす。
。其日は夫より女工場（女工場）へ戻りて、衣装をぬぐ。
。二日目の十八日は午后二時から女工場（女工場）に行く。五六時頃に練り出

す。(演舞場へは一切この一行は立寄らざるものと心得べし) 中筋、黒右恵町などを廻る(道頓堀をこの日廻ることもあり) 中筋の紀の庄(これは見番の如き家)の門をに休む。(中休はこ、丈なり)

。十九日最後の日は。練出すのは前日同様にて今年はたしかこの道頓堀を通りしと思ふ。宗右恵町え廻りて富田屋(見番。兼。青楼)のかどに休みて十二時迄に女工場アヅマへ戻る。これにて宝の市の了りとす

取材メモは、十月十八日・十九日に鏡花が南地で楽しんだ練行列の見聞から始まり、次いで、十七日に住吉神社で行われた祭式の次第を記し、ふたたび練行列の実際に戻って、書き納められている。

一枚目に「稚児は何れも舞子(中略)(稚児のなりは写真参照)」と記された稚児の「写真」は失われているが、前に掲げた『第三十回 芦辺をどり』プログラムの【写真②下】に類したものであったろうか。同じく、「囃子は図の如くならびて、前太鼓。に。つゝみ。後ろ、八雲琴。と。すり鐘。」と記された「図」も失われているが、前囃子が奏した、太鼓、八雲琴、すり鐘などの楽器は実際に即している。また、その装束「髪。つぶし嶋田、に、絨縮緬マツの、かけおろ

し、(かけおろしは結びさげの意)／着附の色。とき色に白のうらを用ゆ。白の、しゃのかり衣。黒襦子の帯(箱文庫に結ぶ)は、「南地心中」のお美津の装束「髪は結びたての水の垂る、やうな、十六七が潰し島田。(中略) 緋縮緬のかけおろし。(中略) 着つけは桃に薄霞、朱鷺色絹に白い裏、膚はだの雪の紅くれないの襲かさねに透くやう姫なまめかし、白の紗の、其の狩衣を装ひ澄まして、黒襦子の帯、箱文庫。」(十八)(傍線引用者)に、そのまま活かされている。

「南地の女工場アヅマ」の説明ともつながる「市女は総て芸者なり」との記載が、「南地心中」発想の基盤となったことも見逃せない。住吉大神に供奉する神聖な女性に芸妓が扮する。鏡花はそこから、落籍されて「御寮人」でいたものを、丸官の「飛んだもの好ずきから、洒落に又鑑札を請けて」(三)芸者になったお珊を主人公とした花柳小説を著したのである。市女に付き人が灯して歩く蠟燭台をスケッチするなど、練行列を観察する鏡花の視線は細かい。

二枚目から三枚目前半には、鏡花が来阪する前日に住吉大社で執り行われた神事の次第が詳述されている。——「式日の前晩の十二時より、女工場アヅマへ行きて、入浴の後、髪を結び、衣装を整へ前般の支度をなす」。そして十七日朝、市女は住吉神社に赴き、「さつきの御殿」で式に臨む。「正面床の間の所に行き神主より土器に御酒をうけ、結び昆布。檜扇。を与へられて自分の定めし席に戻る。これ

は一人々々に同様のことを為す。さらに、「みこ」来りて。白粉をつけ、紅をさし。天井眉。を墨く。――

これは、「戴盃式粉黛式」と称されるもので、「住吉大社特殊神事」に記される「宝の市神事次第」に合致する。

午前七時頃 五花街役員先著

市女稚児附添人著社、粉粧

正 午 各供奉員参集

午後一時 戴盃式粉黛式

先 神館所定ノ座ニ職事、副役神楽女、五花街役員等順次著席

次 相生昆布ヲ副役ノ前ニ置ク

次 加柄ヲ神楽女ノ前ニ置ク

次 粉黛台ヲ神楽女ノ前ニ置ク

次 一ノ市女、杉戸入口ヨリ参人一礼着座

中央迄進ム頃、神楽女起座、銚子三方ヲ執リ職事ニ薦ム

次 職事盃ヲ受ケテ乾盃

次 市女盃ヲ受ケ乾盃

次 副役市女ニ相生昆布ヲ授ク

次 粉黛ヲ受ク

次 所定ノ座ニ著ク

一ノ市女粉黛ニ向フ頃二ノ市女入ル、前同断

〔資料紹介〕泉鏡花「南地心中」取材メモ

鏡花の取材メモは、きわめて正確だった。

この取材メモに基づいて、「南地心中」では式の様子が次のように描かれた。

支度の夜は丑満頃より、女紅場に顔を揃へて一人々々沐浴をするが、雪の膚も、白脛も、其の湯は一人づ、紅を流し、白粉を汲替へる。(中略)

さて住吉の朝ぼらけ、白妙の松の樹の間を、静々と詣で進む、路の裳を、皐月御殿、市の式殿にはじめて解いて、市の姫は十二人。袴を十二長く引く。……

其の市の姫十二人、御殿の正面に揖して出づれば、神官、威儀正しく彼処にあり。土器の神酒、結び昆布。やがて松扇を授けらる。これを受けて、席に帰つて、緋や、萌黄や、金銀の縫箔光を放つて、板戸も松の絵の影に、雲白く梢を繞る松林に日の射す中に、一列に並居る時、巫女すると立ち出でて、美女の面一人毎に、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛を描く、と聞く。(十九)

伝聞の形を採っているように、鏡花は住吉大社での神事に立ち会ったわけではなかった。詳細を知る当地の関係者に取材し、メモをとつて、小説に活かした過程が窺える。

取材メモには、――皐月御殿での神事を終えた市女は松林を練り、



【写真⑤】（住吉大社提供）

ものかもしれない。

三枚目後半は、十八、十九両日の練行列の道筋に言及する。「道頓堀」「黒右恵町」「宗右恵町」（正しくは、九郎衛門町、宗右衛門町——引用者注）など、南地の地名・町名や、「紀の庄」「富田屋」など、貸座敷の名が記されている。両店とも『第三十四回 芦辺をどり』プログラムに付された「南五花街遊廓貸座敷案内 芸妓扱店之部」に採録されている。とりわけ、富田屋はお珊が見得を切る台詞「此の一月は籍のある、富田屋の以前の芸妓、其のつもりで酌をするの^{ひらつき}」(二十一)に登場する、お珊のモデル小三が籍を置く店だった。^⑧

た【写真⑤】のように執り行われたものだろう。

ところで、市女の人数は、鏡花の取材メモや『第三十四回 芦辺をどり』プログラムでは十名。新聞報道によると、この明治四十四年は「小政、政千代、吉二、光子、吉幸、千光、千代香、喜代菊、秀香、春江」（「住吉宝の市神事」「大阪毎日新聞」明治44・10・14）十名の芸妓が奉仕した。鏡花が「南地心中」で実際とは異なる十二名に設定したのは、お美津が装った前囃子の十二名に引かれたものか、あるいは、〈心中もの〉ゆえ住吉大社に遠慮して虚構を施した

「高燈籠の傍、石の鳥居の所」に設えられた「仮宮」に赴き、そこで「十人揃ふて腰かけにならぶ」。そして五穀を交ぜて入れた舂を「一人々々に一箇づ、持ちて仮宮へ供ふ。これを式の了りです」。——と記されている。この仮宮での式は、たとえば、時代は下がるが、昭和四年に撮影され

これまで鏡花作品の成立に関わる取材メモの存在は知られていなかった。「南地心中」は、「大阪の地へ初見参^{うのけんさん}と云ふ意味」(一)の「初阪」を名乗る語り手が作品を進めていくように、初めて訪れた大阪を舞台に、新境地を拓くべく取組んだ作品と位置づけられる。旧友喜多村緑郎が用意した宝の市見物に強い関心を抱いた鏡花は、予備知識を持たない行事の詳細を関係者から聞き出し、写真など関連資料を集めた。翌年の「新小説」新年号を飾るに際して、大阪の読者にも違和感を抱かせないよう、正確を期してメモを取ったのだろう。土地の風俗や行事に積極的に接するとともに、作品化にあたっては慎重な姿勢を崩さない、鏡花の真摯な態度が現れている。

注

- ① 大江良太郎「喜多村緑郎聞書」(劇団新派編『新派——百年への前進』所収、九九頁、昭和53・10・1、大手町出版社)
 - ② 『住吉大社略記』一…御祭礼、二八頁(昭和30・1・1初版未見、昭和59・10・1、再改訂再版、住吉大社社務所)
 - ③ 一無軒道治『難波鑑 第五』「住吉相撲会並宝市」(船越政一郎編『浪速叢書 第十二』所収、三〇九頁、昭和2・7・20、浪速叢書刊行会)、『難波鑑』は延宝八年開板。
 - ④ 田中卓監修『住吉大社史 下巻』第二十一章…祭祀の伝承、五二〇頁～五三八頁(昭和59・10・30、住吉大社奉賛会)、本章の執筆は真弓常忠。
 - ⑤ 喜多村緑郎「南地心中」のことも(喜多村九寿子蔵版『喜多村緑郎追慕』所収、八八頁、昭和48・10・1、演劇出版社)
 - ⑥ 河崎兵二郎編『第三十四回 芦辺をどり』「南五花街遊廓年中行事」四頁～五頁(大正7・4・1、芦辺踊美人帖発行事務所)
 - ⑦ 大阪府編『住吉大社特殊神事』一〇…宝市神事、九八頁～一〇二頁(昭和5・3・24、住吉神社社務所)
 - ⑧ 拙稿「南地心中」の成立過程——泉鏡花と大阪」(『泉鏡花文学の成立』所収、一四〇頁～一五八頁、平成9・11・28、双文社出版)
- 〔付記〕「南地心中」取材メモを紹介した本稿は、注⑧に示した拙稿の補遺を成すもので、鏡花来阪の経緯や住吉大社の資料などに重複する部分がある。『芦辺をどり』プログラムや写真資料などを増補した。